

巻頭言 Foreword

環境・エンジン・計測に向けて

Toward “Environment Engine and Measurement”

今や、ありとあらゆる企業が環境問題を第1テーマとして取り組みだした感がある。堀場製作所のエンジン計測システム統括部は、自動車の排ガス計測をキーワードとして環境問題と早くから取り組んできたが、様変わりに今昔の思いを深くしている。当社がISO 14001をいち早く取得できたのも、常に全社員が環境保護を文化として継承してきたせいかもしれない。

ホリバのエンジンとの関わりは1966年のCO排出規制の少し前から始まるが、人と環境という点では、当社創立以来それにこだわり、それしかやってこなかったと言ってもいい過ぎではないと思う。1961年に世界最初の有人衛星ヴォストークが打上げられたが、それより数年前、当社は低圧室内で働く呼気中炭酸ガス濃度測定装置を開発しデータを提供した。これが排ガス計測機器の原形となった。世界の何処かで大きな技術の飛躍があったとき、当社の技術が何らかの形でこれに貢献してきたことは計測器メーカー冥利につきる。

当初、排ガス計測器は規制値をクリアしているか否かのチェックが主目的だったが、現在は燃費向上や排ガス浄化などと共にエンジン性能の向上、開発に用途が拡大し、直接・間接的に地球環境問題に貢献するところまでに至っている。

現在、当社はエンジンダイナモテスト室2部屋、シャーシダイナモテスト室2部屋を常に稼働させ、お客様と同じ立場に立って提案できる環境作りに努力している。ここで、エンジン内の限られた部位を超高速でガス分析したり、触媒前後と同時に触媒表面でのガスの挙動をリアルタイムに解析できる技術開発に取り組んでいる。大量に放出されるガスの正確な質量計測、FTIR、高速GC、MSなどの汎用分析技術をベースとした極微量成分の測定、さらには、実験である程度の正確な情報が得られれば、その先はシミュレーション解析でと言うエンジン自動計測システムの開発も手がけている。

計測機器を取扱う上で最も基本的で大切なことに、計器の校正とトラブル対応がある。これらも電話回線や通信衛星を利用して手軽にできる時代を迎えつつある。世界のどこにいても欲しい情報をリアルタイムに入手できる今日、それだけの理由で人口密集地域に拠点を構える時代でなくなっている。インターネットを代表する通信網の発達、世界を対象とした最適地生産などグローバル化と、サービスなど人にかかわる部分のローカル化の二律背反をうまく処理できるに違いない。

今や、ホリバは理論上は何でも測れるセンサ、情報処理システム、伝達システムを持っていると自負している。しかし、測定できるということだけでは意味合いは少なく、お客様の目的に応じた使われかた、情報の提供があって始めて計測と言える。さらに、その延長線上が地球環境の改善、少なくとも負荷の軽減へと、つながるだろう。

「地球からお借りした物はできる限り元の形に戻してお返しする」この謙虚な姿勢を失わなければ、まだまだ幾世代にも人類の存在を地球から否定されることはないだろう。



エンジン計測システム統括部
統括部長

松本 興一

Koichi MATSUMOTO